



江藤淳先生追想

佐賀女子短期大学教授
横尾 文子

お盆は、死者との対話にあけくれる。

江藤淳先生が亡くなられてから9年、神道では十年祭にあたる。今夏は、「父祖の地・佐賀」に熱い眼差しを向けてくださっていた江藤先生のごことが頻りに想われた。日本比較文学学会でお会いすると「このごろの佐賀は如何ですか」と、気軽にお声をかけていただくのであるが、3、4分後には、何かしら佐賀のことで叱られてばかりいたからである。

41歳のとき、海軍中将であった祖父江頭安太郎を軸とする「一族再会」を刊行した江藤淳は、このユニークな著書で「私の内部の暗黒」をみつめつけている

「『葉隠武士』の経済観念の欠如とその結果の貧窮は、小心と無知の帰結にすぎず、勇気と無私のあらわれなどではあり得ない。」とし、「この陰惨なイデオロギー」は追放すべきものと断じる一方で、それらは自分の内部にも巣食っていると告白する。

「小心と無知」「勇気と無私」をガシッと噛み合わせる

倫理観（価値基準?）、こういった烈しさが江藤先生を自死に追い込んで66歳の生涯を閉じさせたのかもしれないが、この厳しさなくして、佐賀は「佐賀」でありえないにちがいない。

57歳、平成元年の佐賀市文化会館オープニングでは記念講演に立ち、創作の叙事詩がアナウンサーにより朗読されている。文芸評論家、時事評論家としての仕事をなしてきた江藤淳の唯一の詩作品であり、父祖の地への精一杯の祝意の印しであった。その「佐賀の国の樟の木に寄せて」は、表現こそ穏やかなものの、行く末を祈らずにはおれないという切なさが滲えられ、今も胸をうつ。

「佐賀が栄えるにつれ日本は栄え、佐賀が嘗めた敗北の苦杯をやがて日本もまた味わい、味わいつつもまたさらに栄え、そして佐賀の国の樟の木陰は喜びの日にも悲しみの時にも、私たちがいつも優しく覆いつづけてくれた。まことに佐賀の国は栄える国。」

江藤先生にいただいた書簡は、あくまでも折目正しくお叱りの一片もないけれども、やはり、お叱りの肉声はよみがえり、佐賀の文化育成システムは、これで、よいのか…と考えこまされたお盆であった。

目次

- 巻頭言「江藤 淳先生追想」…………… 1P
- 図書館からのお知らせ…………… 2P
- 図書館の上手な活用法（第2回）…………… 3P
- リサイクルフェアのお礼…………… 4P
- 本で見る佐賀
- 秋の読書週間 県内各館の行事…………… 5P
- 第5回郷土研究講座「鶴殿石仏群について」…………… 6P
- 古文書の紹介「継子を可受がった後妻に褒美」…………… 7P
- レファレンス事例から…………… 8P
- 行事予定 ● 開館日カレンダー

佐賀県立図書館のご案内

所在地 / 〒840-0041
佐賀市城内2-1-41 (県庁東)
TEL / 0952-24-2900
FAX / 0952-25-7049
Eメール / saga-kentosyo@manabisaga.jp
ホームページ / <http://www.pref.saga.lg.jp/kentosyo/>
開館時間 / 9:00～20:00
〔児童閲覧室は10:00～17:00〕
休館日 / 毎月の最後の水曜日